

自己評価報告書

平成23年 4月22日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520667

研究課題名（和文） 『一遍聖絵』にみる中世都市成立期社会の遺跡情報学的研究

研究課題名（英文） Research of archeology, historical science, and geography when medieval city appears in Japan—"Ippenn Hijirie" is the important data-

研究代表者

鋤柄 俊夫（SUKIGARA TOSHIO）

同志社大学・文化情報学部・教授

研究者番号：40319471

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：一遍聖絵、中世都市、中世都市遺跡、地理情報、空間構造

1. 研究計画の概要

現代社会の基盤を構成する都市の源流は平安時代終わりから鎌倉時代に姿を現した。しかしその時の様子は必ずしも詳細に明らかにはされていない。本研究は、この日本における都市成立期の社会構造について、当時の列島各地の姿を描いた資料として有名な『一遍聖絵』を主な題材に、とくに景観の視点から、考古学・文献史学および地理情報学の協業によって明らかにすることをめざすものである。

(1)第1の課題は、『一遍聖絵』に描かれた鎌倉時代地域拠点の詳細な調査記録の作成である。本研究では、これらの地域を全て巡ることにより、それぞれの地域拠点がもっている諸属性を、遺跡をベースにして地理情報学的に見直すことで、中世前半の地域拠点の特質を描き出すことをめざす。

(2)次に本研究の課題とするのが、中世前期における都市成立背景の検討である。ここで注目しなければならないのは、北条氏に代表される海上交通のネットワークと同時にあったはずの内陸交通のネットワークである。本研究では一遍が2度訪れた「善光寺門前」に注目してこの問題を考えたい。

(3)一方、これまで注目してきたような『一遍聖絵』との関係を意識した地域拠点以外にも、同時代において拠点とされた場があったはずである。その点で『一遍聖絵』に登場しない地域拠点にも注目し、陸上交通と海上交通の両面で鎌倉時代の地域社会を復原したい。

(4)最終年度ではこれらの研究をまとめ、その成果をひろく一般に公開したい。

2. 研究の進捗状況

(1)初年度は一遍聖絵についての諸情報を改めて収集し、同時に一遍聖絵に登場した諸地域の現地踏査をおこなった。とくに善光寺門前については、薬研堀と出土遺物の検討から、鎌倉時代に現在と異なる地割りが存在し、また大いに栄えていたこともあきらかとなった。

(2)2年次は『一遍聖絵』の画像分析のための基礎資料として、画像情報のアーカイブおよび整理をおこない、同時に引き続いて港湾遺跡に注目した踏査をおこない、港湾都市のバックグラウンドと地域性および機能にさまざまな形があり、それらを合理的に峻別することが、この時期の都市遺跡を考える上で非常に重要なことがわかった。

(3)3年次は内陸の都市遺跡に注目し、一遍が踊り念仏を開始した重要なポイントである信濃国伴野荘から、信州の鎌倉と呼ばれる塩田平と、武蔵国を縦断する鎌倉街道上道の調査をおこなった。このうち前者では、伴野氏の館とも推定されている野沢城から伴野市庭にかけての一带では、街道と交差する川沿いに市と館が建つ鎌倉時代の風景が特徴になることを確認した。またこれまで戦国期の城とされてきた塩田城も、現地踏査の結果、山林寺院の構造を持っていることがわかり、背後の象徴的な山塊を信仰の対象とした鎌倉時代の地域拠点の特質を明らかにすることができた。

(4)なお最終年度には公開シンポジウムを開催することを計画し、文献学の五味文彦・榎原雅治氏、考古学の山村信榮・宿野隆史・重久淳一・木村浩之・深澤靖幸氏および遊行寺宝物館の遠山元浩氏と議論を重ね、考古学と

中世史研究会との合同により、帝京大学山梨文化財研究所で7月開催の運びとなった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

一遍がめぐった各地への踏査はほとんどの地域でおこない、なかでも「筑前のある武士の館」が武藤大武氏の館である可能性が指摘できた成果は大きい。一遍は九州では武藤、大友そして島津という有力御家人と密接な関係を持っていたことになる。また見付に代表される港湾都市や善光寺と武蔵府中に代表される内陸都市の整理も大きな成果だろう。それを実証する具体的なモノ資料検討が今後の新たな研究課題となる。さらに、この研究を通じて、鎌倉時代の日本列島社会について各地の研究者との議論を深めることもでき、その成果の一端を今年度シンポジウムで公開できることも決まった。

4. 今後の研究の推進方策

一遍聖絵と鎌倉時代の日本列島という非常に大きなテーマに対し、今回の研究が果たした役割は、上記のように大きい。しかし、鎌倉時代の日本列島には、一遍聖絵に描かれなかった地域拠点も多くあり、それは意図的に描かれなかった場合も含めて、別の意味で鎌倉時代の謎を解く鍵となる。

そのため、本研究で明らかにされた多くの点と同じくらい、今後明らかにしなければならぬ鎌倉時代の日本列島社会に関わる問題も顕在化してきたことになる。今年度のシンポジウムでは、その点が討論のテーマとなるであろう。また今回の研究では大きな枠組みでの地域拠点の姿に一定の見通しを与えることはできたが、具体的な個々のケースについての検証はまだ多く残されている。今後の遺跡と文献の協業による分析は、この成果を受けて有機的に行われることになるだろう。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①鋤柄俊夫、書評 飯村均著『中世奥羽のムラとマチ 考古学が描く列島史』、日本歴史、第753号、102～104、2011、有
- ②鋤柄俊夫、鎌倉時代の稲荷の氏子、朱、第52号、131～138、2009、無
- ③高橋慎一郎、鎌倉と災害、開発と災害(中世都市研究14)、新人物往来社、141～160、2008、無

〔学会発表〕(計2件)

- ①鋤柄俊夫、都市の蔵と館の蔵(中世人のたからもの-蔵があらわす権力と富-)、考古学

と中世史研究会、2010年7月3日、帝京大学山梨文化財研究所(山梨)

②鋤柄俊夫、善光寺とその門前の考古学的景観復元(詣の中心と周辺)、日本民俗建築学会、2008年10月13日、善光寺講堂(長野)

〔図書〕(計8件)

- ①高橋慎一郎(編著)、高志書院、列島の鎌倉時代、2011、261
- ②高橋慎一郎ほか、東京大学出版会、権力とヘゲモニー(伝統都市2)、2010、292
- ③鋤柄俊夫、昭和堂、中世都市遺跡の見方・歩き方、2010、271
- ④鋤柄俊夫、高橋慎一郎ほか、高志書院、善光寺の中世、2010、225
- ⑤高橋慎一郎、高志書院、中世都市の力、2010、239
- ⑥高橋慎一郎、吉川弘文館、鎌倉の世界、2010、258
- ⑦高橋慎一郎、千葉敏之、東京大学出版会、中世の都市、2009、269
- ⑧鋤柄俊夫、雄山閣、中世京都の軌跡-道長と義満をつなぐ首都のかたち、2008、172